高邁

――篆書に取り組む――

石川圭一

大規模な公募展に出品する作品は、古代文字を素材に小字数で制作することをテーマとしている。この拙作も、殷末・西周期の金文で「高邁」（『晋書』）の二字を縦一六五㌢横七五㌢の画仙紙に仕上げた。

漢字には、篆書・隷書・草書・行書・楷書の五書体あるが、篆書は甲骨文も含めれば、紀元前一三〇〇年頃から秦の小篆に至るまで、およそ一〇〇〇年以上の間、使われた書体で、隷書の発生から、楷書の完成までの千数百年とほぼ同じ期間、篆書は使われていた。ゆえに、ひとくちに篆書といっても、時代や地域差によって、全く別の書体であったといってもよいほど複雑な書体といえる。

古代文字による制作は、撰文してから紙に向かうまでに、文字様式の整理と校字に、それなりの時間を要する。

校字には白川静著『字統』（平凡社）・高明編著『古文字類編』（中華書局）・容庚編著『金文編』（中華書局）を使用。

「高」は毓且丁卣・𠂤方彝に見られる形。「邁」は、彔伯簋（金文以萬字「金文編」）に見られる。

この作品は、第三十八回日展（於東京都美術館・平成十八年十一月二日～二十四日）に出品し、陳列されたもの。